

旭川医科大学 回顧資料(8) 昭和55年度

「中央研究棟ニュース」(現「機器センターニュース」)の発刊

1980年(昭和55)年といえば、6月に衆議院・参議院のいわゆるダブル選挙が初めて行われた年である。この選挙戦の最中に首相の大平正芳が心筋梗塞で急死し、浮動票の多くが与党自民党への同情票につながり、同党は圧勝した。選挙後の特別国会では、大平派の大番頭格であった鈴木善幸が新首相に就任した。もともと彼は、リーダーシップには乏しくむしろ党内の調整役に徹するという、地味なタイプの政治家として知られていた。彼は就任早々「和の政治」を唱えた。こうして、自民党実力者とそれに率いられた派閥が血で血を洗うような権力闘争に明け暮れた「三角大福」(首相就任順に並べると田中角栄・三木武夫・福田赳夫・大平正芳)の時代は終焉を告げたのである。

新首相誕生2日後の7月19日は、第22回オリンピックモスクワ大会の開会式にあっていた。しかし、日本・アメリカなど主要先進資本主義諸国は、前年12月に起こったソ連(当時)のアフガニスタン侵攻に抗議して、このオリンピックへの参加をボイコットしていた。柔道の山下泰裕、マラソンの瀬古利彦など、メダルを期待されていた当時の有力選手たちの多くが無念の涙を飲んだ。他局を出し抜いてソ連に多額の放送権料を払い、同大会の独占テレビ中継をもくろんでいたテレビ朝日も、すっかりあてがはずれた。

この年の医療関係のニュースとして特筆すべきは、埼玉県所沢市の富士見産婦人科病院の乱診・乱療が判明したことである。同年9月、同病院の理事長が無免許診療で逮捕された。彼は、必要のない臓器摘出手術などを相次いで行い、被害届の提出者は900名にも達した。しかし、のちに告訴はすべて不起訴となった。

大学関連の大きな事件としては、3月に早稲田大学商学部で入試問題の漏洩が判明したことがあげられる。漏洩に関与していた同大学職員4名が逮捕され、のちに起訴された。また、斡旋疑惑の早大教育学部教授が解任された。同月31日には同大の不正合格9人が入学を辞退した(なお、翌年5月、早大は、1971(昭和46)年以降の不正合格者55名(うち卒業者42名)の除籍を決定した)。ちなみに大学受験といえば、11月29日には、神奈川県川崎市の高級住宅で2浪中の予備校生が両親を金属バットで撲殺するというショッキングな事件が起こり、以後、マスコミはこの事件をいわゆる「受験地獄」と結びつけて大々的に報道していった。

芸能界の話題をひとつあげると、人気絶頂の歌手・女優であった山口百恵が3月7日に俳優の三浦友和との婚約を発表し、以後、引退・結婚までの約200日間、いわゆる「百恵フィーバー」がつづいた。彼女の自叙伝『蒼い時』(といっても実質的な執筆者はコピーライターの残間江里子)は、発売1ヶ月で100万部以上が売れたとされる。

さて、この年、わが旭川医科大学では、3月に、附属病院中央診療棟Bの3階135平方メートル分が増築され、また、講義実習棟2階の第1・第2講義室の改修が成った。さらに、大学首脳陣の居城である学長棟・副学長棟・局長棟の新工事が完工した。こうして本学の建物の体裁は、いちおう完成の域に達した。船出して8年目、ほぼ順風満帆の1年であったといえよう。同月に卒業した学生(第2期生)は、男性77名、女性10名の計87名であった。入れ替わりに4月に入学したのは、男性112名、女性8名、計120名であった。まだまだ女子学生は少数で、医学科入学生の3分の1ほどが女性で占められている昨今と比べると隔世の感がある。

この年、本学には、新首相と同様、特筆すべき派手な話題はなかったようである。そこで地味な話題を1つ紹介しよう。国会で新首相が誕生した約2ヵ月後の9月20日付で、A4判2ページだでの簡素な印刷物「中央研究棟ニュース」が本学中央研究棟運営委員会によって発刊された。当時、同委員会委員長は第二生理学講座の森茂美教授であった。このニュース誌は、第2号が12月10日付、第3号は翌1981（昭和56）年3月20日付で刊行され、同年6月20日付の第4号からは名称が「機器センターニュース」と改められた。そしてその後もほぼ3ヶ月に1度のペースでコンスタントに発行され、同センターの人事や新しい機器などが紹介されてきた。やがて、記事にすべき内容が増えてきたためであろう、1982年6月21日付の第8号で初めてA4判4ページとなり、以後、原則として4ページだてとなった。この「機器センターニュース」は2003（平成15）年末までに通算93号を数えている。

この「中央研究棟ニュース」（現「機器センターニュース」）を創刊号から読み通すと、本学が過去20数年間にわたって導入してきた研究用機器の種類とその性能の変遷ぶりがわかって興味深い。今回は、同ニュースの中から、1980年12月10日付の第2号の内容の一部を紹介しよう。電子顕微鏡やオシロスコープの性能に文字どおり隔世の感があることが読み取れよう。

（旭川医科大学 歴史・哲学 藤尾 均）

中央研究棟 ニュース

No. 2

昭和55年12月10日

編集・発行

旭川医科大学

中央研究棟運営委員会

デジタル・ストレージ・オシロスコープと
ファンクションジェネレーター

電子顕微鏡室紹介

前に中央研究棟に用意すべき機器についての希望をアンケート調査したことがあります。その中のいくつかは購入できました。今回は表題の2機種を紹介します。

いまある変化をオシロスコープで観察していたとします。1秒間に50回同じ変化が繰返すときは、止まって見えますから問題ないのですが、1秒間に1回とか、数回なにか変化がおきるといときは御手上げです。このようなときに、デジタルストレージオシロスコープは役に立ちます。ボタンをポンと押しますと、波形が残って止まってあらわれてくれます。ブラウン管の輝点がいつ動き出すかは、ファンクションジェネレーターを使用して、トリガパルスをオシロに入れて制御することができます。このファンクション・ジェネレーターは0.002Hzから2MHzまでの正弦波、三角波、方形波、のこぎり波、パルス波を出すことができ、多彩な用途に適應できるように作られています。オシロの性能はDC~10MHz、2現象で、最大200秒の遅いスイープ時間でも安定した連続波形が得られ、瞬間的波形の記録と再生ができます。データの処理には電子計算機を役立てて下さい。このような手近かにあるものを利用して実験装置を組立てていくのも、ひとつの方法で、勿論時間は多少かかりますが、すべて便利に作りあげられた装置では得られない測定ができるかもしれません。

中央研究棟は昭和49年5月に建物が完成され、他の機関、研究室等の建物が完成するまでの間暫定利用に供されてきました。この間1階の電顕室超遠心機室、低温室のみが活動を開始しました。電顕室では透過型電顕2台、最高加速電圧125KVの日立HU-12A型と50KVの日立HS-8型が設置されこれに関連した超ミクローム、ピラミトーム、ナイフメーカー、ポリマライザー、点光源引伸器などが備えられました。51年9月に他の機関の完成に伴って中央研究棟全階が使用できることになり、その後53年3月に走査型電顕、日本電子JSM-25が設置され、関連した臨界点乾燥装置も入り多くの人に利用されることとなりました。翌年3月には分析電顕、日本電子JEM-100CX型（サイドエントリー構成）が設置されました。この機器はX線マイクロアナリシスによる元素分析において、X線を「波」の形で検出する従来の波長分散形（WDS）に対して、それを粒子の形で検出し電気的にエネルギーの選別を行うエネルギー分散形（EDX）でデータディスプレイ装置にマイコンが組込まれていて11Na~92Uまで検出できます。以上の様に電顕室は多くの機器が設置され利用者も全学科目、講座の7割が使用しています。